
初恋は、失恋のはずが・・・・・・・・

こいん0712

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋は、失恋のほずが……………

【Nコード】

N 6 1 6 6 K

【作者名】

こいん 0 7 1 2

【あらすじ】

主人公 神埼シン

シンが好きだった親友の妹、了

哲平が死んだ時に

了の事は忘れて、諦めたはずなのに……………

第1話 再会（前書き）

どうも、こいん0712です

綺麗だねゝの方が、ネタ切れになったのでちょっと休んでこの小説を書いていきたいと思っています

第1話 再会

僕は、神崎 シン

どこにでも、いそうな平凡な男子だ

勉強も、運動も、すべてが平凡な男子だ

そんな、僕にも親友がいた

名前は、萩原 哲平こいつは、勉強も、運動もすべてが特上の上の
スーパー男子

僕とは、別格の奴なのに何故かお互いに「親友」と呼べあえるほど
仲がいい

でも、哲平は1年前、事故で死んでしまった

哲平に、了っていう妹がいるんだけど、哲平の葬式の時かなり、泣
いてたなあ

僕は、その哲平の妹、了ちゃんの事が、哲平が死ぬ前から好きだった
でも、親友の妹っていうのもあって告白せずに、時間が経って忘れ
たと、もう会うことも無いだろうと思っていた……

今日は、哲平の命日だ。

僕は、学校の帰りに花束を持って、哲平の墓にやって来た

ちなみに、僕は高校2年生

「おつす哲平、俺は元気だけどお前は元気か？・・・まっ死人に元気はおかしいか」

「お前がいなくなつて、寂しいよ俺あんまり友達いないからさ」
哲平は、人望があつくて、フレンドリーな奴だった、
そんな、哲平に僕は、嫉妬していた

「じゃあな、哲平ここにいると泣けてくるから俺帰るわ」
僕は、そう言つて花束を置いて帰ろうとすると

「神崎・・・君？」

僕が、振り向くと僕の初恋の人そして、哲平の妹の了ちゃんがいた

「久しぶり、了ちゃん」

心の中がモヤモヤした

「神崎君何でここに？」

「ほらっ今日こいつの、命日でしょっ俺は、これでもこいつの親友だからさ」

「ありがとう・・・兄ちゃんも喜ぶと思つよ」

「ちょっと、お茶しない？久しぶりに神崎君と話したいからさ」

「えっ」

僕は、その言葉に少し途惑った
了ちゃんと、話しているとまた好きになっちゃうかもしれない
でも、断るのも悪いし

「いいでしょ？」

「うん、いいよ」

僕は、行く事にした

「カライン カライン」

「何名様でしょうか？」

「二人です」

「こちらへどうぞ」

店員に案内される

ここは、「クロノス」哲平との思い出の場所、結構、部活帰りに寄
ったりした

「何にする？」僕は、聞いた

「うーん、じゃっコーヒーで」

「俺は、ナポリタンとコーラで」

店員に頼んだ

「神崎君、ナポリタン食べるの？もう少しで夕飯の時間だよ」

「部活終わりだからさ、この後トレーニングするつもりだし。了ち
ゃんはコーヒー飲めるんだね。俺、苦いから無理だよ」

「やっぱり、神崎君って子供っぽいね」そう言っただちは笑った

「やっぱりって何だよ」僕も、笑った

「昔家、遊びに来た時があったでしょ？その時私も一緒に遊んだり
してたけど、子供っぽい
人だなんて思ってたの」

「バカにしてる？」

「いやっそういう意味じゃなくて、うーん何て言えばいいのかな？
そばに居ると安心できるというか・・・ゴメン！！」

「何で、誤るのさ別に悪い事したわけでもないのに」
正直、安心できると言われて嬉しかった

「おまたせしました」店員が頼ん物を持って来た

「いただきマース」僕は、ナポリタンを食べ始めた
ここの、ナポリタンは美味い。哲平が死んでから、来てなかったけ
どやっぱり美味い

「了ちゃん、学校どう？」

「どうって、神崎君と一緒にの高校なんだけど」

「えっそうなの？」

そつえば、僕より一つ年下だから、おかしくもないか

「もうっ知らなかったの？学校でも結構すれ違うのに何で、話しかけてくれないのかなあって思ってたんだよ・・・まさか知らなかっただなんて」

「ゴメン、ゴメン俺、学校では基本ボーっとしてるだけだからさ」

僕達は、笑った

「ところで、了ちゃん話って何？」

「別にそんな重要な話はないよ、ただ神崎君と話が、したかっただけ」

「そうだったんだ、」

「うん」

「そろそろ出る？もう結構暗いよ」

本当は、さっさと帰りたいだけ

これ、以上了ちゃんと一緒に居ると胸が苦しくなって破裂しそうだ

「そつしょっか」

僕達は、自分が頼んだ分の代金を払って外に出た

「家の場所、変わってないでしょ？」

「うん？」

「じゃあ、送ってくよ夜道は危ないし」

「ありがとう」

後少し、少しだけ一緒にいて了ちゃんの事はすっぱり諦めようそう思った

「神崎君さあ、兄ちゃんの葬式の時泣いていた私を抱きしめてくれたよねえ？」

「うん」

僕は、恥ずかし過ぎてそれしか、言葉がなかった

「それって、私の事好きだったからしたの？」

「うん、あの時は了ちゃんのこと好きだった」
言ってしまった

「でも、今はそんな、感情はないから安心して」

「えっ」

了ちゃんの言葉を無視して

「じゃあバイバイ」

「バイバイ」

強引にでも、話を変えないと了ちゃんのこと、また好きになりそう
だった

了ちゃんの事は忘れたはずなのに……………

第1話 再会（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

この小説は、親友の妹が好きって言うところだけ、実話です

感想、アドバイスよろしくです

第2話 きっかけ（前書き）

どうも、こいん0712です

感想、アドバイスよろしくお願いします

第2話 きっかけ

僕が、了ちゃんが好きになったのは、哲平の家に行ってからかな
ここから、思い出話になります。

「おじゃましまーす」

「いらっしやい、神崎君」

哲平の、お母さんがいつも出てきてた

哲平と、了ちゃんは部屋が一緒だから、僕達が遊んでる時も了ちゃんが、部屋にいる事が多かった

「了ちゃんも、一緒にトランプやる？二人じゃ、つまんないからさ」

「何で、誘うんだよ。いいじゃねえか二人で」

哲平と、了ちゃんよく喧嘩してたなあ

僕は、兄弟がいなかったからうらやましかったな

「まあ、そんな事言わないでいいじゃない。ほらっ了ちゃんも座って」

「うん」

「じゃあ、大富豪でもやろうか」

.....

「あもーうう、やだ。また、大貧民だよ。了ちゃん強いんだね」

「神崎君が弱いだけだよ」了ちゃんは、笑いながら言った
この時、初めて神崎君って呼ばれたなあー
それまでは、ずっと名前で呼んでくれなかったし
出来れば、シン君とかの方が嬉しいけど

それから、了ちゃんが居る時は、よく了ちゃんと哲平と3人で遊んだな

たまに、了ちゃん目当てで、哲平の家に行った事もあったけな

そうして、遊んでくうちに僕は、了ちゃんのが、好きになってた

いつも、笑ってる了ちゃんのが好きになってた

「了ちゃんさあ、好きな人とか居るの？」

おもいつきて、聞いたこともあったなあ

「えっ、……いないよ好きな人は、でも気になる人は居るかな」
顔を、真っ赤にして「了ちゃんが言った

「そうなんだ。もしかして、俺？」

「違うよ、神崎君は友達だもん。それ以上の関係は、考えられないよ」

この時僕は、かなりショックだった

「そうか……変な事聞いてゴメンね」

その話終わってから、ちよつと気まずかったな

何で、僕は告白しなかったんだろう。哲平に嫌われるのが嫌だったのかな？

哲平は、了ちゃんのことを嫌ってたから、哲平に相談できなかったし

何で、哲平は了ちゃんのこと嫌いだったんだろう？いい子なのに

でも、了ちゃんのこと嫌ってた哲平が、了ちゃんの代わりに死んだもんな……………

3話に続く

第2話 きっかけ（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

次回は、哲平が死んだ理由を書きたいと思います

第3話 哲平の死（前書き）

どうも、こいん0712です

今回も、思い出話です

第3話 哲平の死

哲平が、死んだのは去年の8月………

いつも通り、了ちゃんと、哲平と僕で帰っていた

了ちゃんの、中学は僕の高校の前にあるので、よく一緒に帰っていた

「了ちゃん、学校どうだった？」

「別に、いつも通りだよ。変わった事といえば、先生のヅラが取れたことぐらいかな」

「マジで、先生もかわいそうに」僕と、哲平は大爆笑した
先生の、ヅラがとれるってどんなことが起こったんだろう

「私、ボタン押していい？」

ボタンというのは押しボタン信号のボタンだ

「いいけど、了ちゃん中3でしょ、恥ずかしくないの？」

「こいつは、いつまでもガキだからしょうがないんだよ」

「もうっ、そんなことないよ兄ちゃん。さっ青だ渡ろう」

「了ちゃん、危ない！！！！！」

信号無視した車が突っ込んできた

地面に赤く血が流れている

「哲平！！」僕は、哲平の近くへ駆け寄った

哲平が、了ちゃんを突き飛ばし了ちゃんの代わりにひかれていた

「大丈夫か、哲平！今、救急車呼ぶからな」僕は、携帯を取り出し助けを呼んだ

「了は……………」

「無事だよ、お前のおかげでちゃんと生きてる」僕は、泣きながら言った

涙で、目がかすむ

「兄ちゃん、ゴメン、私のせいで私の……………」

「だから言ったんだお前はいつまで経ってもガキなんだよ。信号が青でも確認ぐらい、しろっての」

「本当だよ、私は子供だった……………ゴメン兄ちゃん」
了ちゃんが、哲平を抱きしめた

了ちゃんの、服が哲平の血で赤く染まっている

その後、哲平は病院に運ばれたけど……………もう運ばれた時には死んでいたらしい

哲平の葬式……………

「私のせいで、私のせいで兄ちゃんが、兄ちゃんが死んじゃったよ
う」

了ちゃんは、ずっと泣いていた。葬式が終わってから……

誰が、慰めてもずっと泣いていた

「了ちゃんのせいじゃないと思う」

こんな事を言ったのは僕が始めてだった

だって、周りは了ちゃんを、慰めてたけど全員了ちゃんのせいだと思っ
ているんだろうか？

皆、目が冷たい

了ちゃんは、普通の女の子、哲平はスーパー男子。死ぬんだっ
たら了ちゃんの方がいいと思っただろうか

「神崎君……」

「了ちゃんの、せいじゃないよ。だって悪いのは信号無視をした、
車のほうだろ。何で了ちゃんのせいになるのさ。むしろ、了ちゃん
は笑うべきだよ」

周りは僕のことを、何言っただこいつという目で見る

「えっ」

「だってさ哲平は、命を賭けて了ちゃんを守ったんだよ。そんな、
最高の兄貴だったんだから……最低の結果だったとしても笑っ
て天国に送ってやるべきじゃないのか？あいつも、泣いてる了ちゃん
より、笑ってる了ちゃんのほうが好きだよきっと。何で泣くのさ、
最高の兄貴を、笑顔で送ってやるっよ
ねっ？」

この時、僕は了ちゃんを、抱きしめた

「うん・・・ありがとう神崎君。」了ちゃんは、ちょっと顔を赤くしながら言った

周りは、まだ僕のことを変な目で見ている。言いたいことがあるんなら言えばいいのに

「兄ちゃん、ありがとう私を守ってくれて、ありがとう」「了ちゃんは、笑顔で言った

「そうそう、それでいいんだよ。哲平もきつと了ちゃんを、守って良かったって思ってると思う」

「うんっ」了ちゃんは、涙を溜めながら笑った

この時、また僕は了ちゃんを抱きしめた

「神崎君、私も笑顔でいたいよ。でもね、我慢しようとしても涙が出てくるんだ」

「いいと思う、哲平を笑顔で送れたんだったら、その後は泣いてもいいんだよ」

「本当？」

僕は、黙ってうなずいた

その後、了ちゃんは僕の胸でかなり泣いた

哲平は、いい兄貴だったんだなあ

でも、哲平が死んでも、大変だったな

4 話に続く

第3話 哲平の死（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます

感想、アドバイスよろしくお願いします

第4話 イジメ(前書き)

どうも、こいん0712です

今回も、思い出話です

多分、思い出話は次回か今回で終わ리と思います

第4話 イジメ

哲平が死んでから、1週間くらいしてからかな？

僕が、一人で帰ってたら誰もいない公園で、男女の集団にイジメられてる了ちゃんがいた

僕は、早く助けに行かなくちゃと思ったたら「お前のせいで、哲平君は死んだんだよー」

「お前が、死ねばよかったのに」「しかも、何葬式の時、男に抱きしめられてんだよ。もしかしてお前それが、目的で哲平を殺したんじゃないんだろな」

あれは、うちのクラスの奴等

「そんなこと……」

「何か言えよオラあ」

一人が、了ちゃんを殴ろうとした

「やめとけって、女の子相手に殴るのはないでしょ　それに、了ちゃんはその事する子じゃないって」

僕は、なんとか間に合った。哲平が、命を捨ててまで助けたんだから、傷物にしちゃいけないしね

「お前……神崎。何でだよ、お前も哲平君が死んだのこいつのせいと思ってんだろ」

「そういえばさ、哲平君の葬式の時こいつ抱きしめてたの神崎だよ
ね」

この中の女子が言う

「マジでーじゃあ哲平君を、殺したのは、お前もグルかあ？最低だ
なお前」

「最低だよ。親友がしんだのに涙一つも出ないんだから」
僕は、自分で自分のことを言った

「行こうぜ」了ちゃんをいじめてた奴等はどこかに行った

「ゴメン、神崎君私のせいで神崎君も変な事言われちゃって」

「別に、いいよ。それよりもう、俺に近づかないほうがいいと思う」

「えっ」

「あいつら、クラスでもさ結構イジメをやってる奴等なんだよねし
かも、かなり酷いやつ。多分次、俺が標的になるから、俺の近くに
いたら了ちゃんも、イジメられるでしょ」

「別に、いいよ！そんなの。私は……」

「よくないよ。了ちゃん、あれだけで泣いてるのに、あれより酷い
のに耐えれっこない」

了ちゃんは、涙を流していた

「後、通学路は、代えなよ」

僕は、走って自分の家に向った

これで、いいんだ。これで、了ちゃんの事は忘れよう。諦めよう・・・

こうして、僕の初恋は失恋に終わった

そして、次の日学校に行くと案の定僕は、イジメの標的にされていた

「オラっ何、人殺しが教室で弁当食ってんだよ」と言っ**て**弁当を投げられた

「あーあもう食えないジャン。あのさあ小さい頃ママに習わなかったのかな食べ物を粗末にするな**つて**さあ。この、マザコン野郎**！**」

僕は、何かイライラするからそいつの、顔面をおも**い**つきり殴った

そして、倒れた所をさらにボツコボコにした

その後は、目に見えるイジメは無かった。でも影で僕の、悪口を言われたり、変な噂を流したりして**る**のは知っていたけど、僕は全部、無視していた

2年になってからだ**つ**たと思うけど時間が経**つ**ていくうちに皆、僕のことは言わなくな**つ**た・・・

それから、いろんな人に喋りかけられてたけど、全部無視していた。僕の、悪口を言**つ**てたかもしれない奴と喋**つ**ても意味ないから**ね**

もう、思い出はこのくらいかな？

第4話 イジメ（後書き）

最後まで、読んで下さってありがとうございます

この、小説は後、3話ぐらいで終わる予定です

感想、アドバイスよろしくです

第5話 了の思い（前書き）

どうも、こいん0712です

今回は、了目線の話です

第5話 了の思い

私は、神崎君のことが好きだった

神崎君が「一緒に遊ぶ？」と言ってくれたときから好きだった

神崎君に、好きな人はいる？って聞かれた時も、照れ隠して神崎君
なわけないって言ってしまった

本当は、友達以上の関係になりたいのに

神崎君が、助けてくれた時、「好きだから一緒にいたい」って言おうとしたのに・・・もう近づくな、なんて言われたら涙しか出ないよ

今も、あの時の事を思い出すと涙が出る

兄ちゃんの葬式の時、神崎君が励ましてくれなかったら、抱きしめてくれなかったら私、ひきこもりになってたかも

神崎君に再会した時は、嬉しかったな。もう会えないって思ってたから・・・神崎君のこと、諦めれないまま

神崎君は、私のこと、どう思ってるんだろう、おもいきって聞いてみたら「昔は好きだった、でも今はそんな感情ないから、安心して」なんて言われたら逆に安心出来ないよ

昔は、神崎君が私の事好きでいてくれたんだったら告白しとけばよかったな

どうしようも出来ない事を、考える

私は、神崎君のこと、まだ好きなのに神崎君は私のこと、もうなんとも思っていないんだ

悲しいな．．．．．涙が出てきちゃった

我慢しても、涙が出てくる。兄ちゃんの葬式みたいに

私は、この思いを誰にぶつければいいんだろう？

兄ちゃん？母さん？父さん？友達？

違うよ、やっぱり神崎君に伝えなきゃ。神崎君にぶつけなきゃ

「よしっ神崎君に告白しに行こう」私はそう、眩き準備をして玄関のドアを開けると

「何で．．．．．神崎君が？」

神崎君が、私の目の前にいた

夏の、ちよっぴり冷たい夜風が吹いた

第5話 了の思い（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

ちょっと、短かすぎたかな？

次回、クライマックスです

感想、アドバイスよろしくです

第6話 告白（前書き）

どうも、こいん0712です

今回でまた、シン目線に戻ります

第6話 告白

「あのさっ」「了ちゃんと、僕が同時に喋る

「……公園にでも、行こうか」

「うん……」

僕達は、公園に向った

夏とはいえど、夜は結構、肌寒いジャンパーでも、着てくればよかったな

公園までは、二人とも無言だった

何か、気まずい……

僕達は、公園のベンチに座った

「ひゃっ」

「どうしたの?」

「ベンチが、冷たくて」

今の、了ちゃんの声……色っぽくて、ちょっと興奮しちゃった

「了ちゃん、真面目に聞いてほしいんだけどさ」僕は、了ちゃんの

肩をつかみながら言った

「うん……」

「俺……了ちゃんの事が好きだ。さっきは、了ちゃんの事もう、なんとも思っただけで言っただけ、やっぱり了ちゃんの事が好きだ。いつも、笑ってる了ちゃんが好き」

「えっ」

「ゴメン……この気持ちだけ了ちゃんに伝えようと思ったただけだから」

僕が、ベンチから立とうとすると

「待って」

了ちゃんが、僕の手を引っ張って僕を、ベンチに座らせる

「私もね、神崎君が好き。私も遊ぶ？って誘ってくれた時から好きだった……」

神崎君は、私をいつも笑ってる子だと思ってるかもしないけど、違うよ

神崎君に、もう近づくな。なんて言われた時。家でいっぱい泣いたし、兄ちゃんの葬式の時だって神崎君が、笑わなきゃダメだって言ってくれなきゃ、抱きしめてくれなきゃ、今も、笑ってられないかもしれない。でもね、今は笑ってられる、だって神崎君と両思いに、なれたんだもん」

「うん……じゃあ俺と付き合ってくれるの？」

「もちろん♪喜んで♪」

「ありがとう」僕は、ホッとしたのか涙が出てきた

了ちゃんの方を見ると、了ちゃんも泣いていた

「了ちゃん？」

「こっち見ないで。恥ずかしいから」

「大丈夫。俺も嬉しすぎて泣いてるからさ。こっち向きなよ」

「うん」

了ちゃんは、こっちを向いた

「私もね、神崎君と両思いに、なれたって思うと、嬉し涙がでっ」

僕は、了ちゃんにキスをした。人生初めてのキス

短い、フレンチキス。でも・・・僕の、ファーストキスは、ほんのり甘い感じがした

「何で、いきなりするかな？」

「嫌だった？」

「嫌じゃないけど・・・・・・・・私の、初めてだった」

「俺もだよ、了ちゃんが、初めての人」

僕達は、もう一度キスをした

さつきより、ちょっとだけ長いキス

僕と、了ちゃんはお互いに目をそらし顔を赤くした

「帰ろうか」

「うんっ」

僕達は、手を繋ぎながら了ちゃんの家へ向った

そして、了ちゃんの家に着くと

「今度さ、哲平に報告に行かなきゃね。俺達の事」

「そだね、兄ちゃんもきつと、喜んでくれるよ」

「うん。じゃあ、俺帰るね。バイバーイ」

「バイバイ」

最終話に続く

第6話 告白（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます

いよいよ、次回最終回です

感想、アドバイスよろしくです

最終話 涙（前書き）

どうも、こいん0712です

今回で最終回です

最終話 涙

僕達が、付き合い始めて1年

哲平に僕達のことを報告しに来ている

「兄ちゃん、私ね今神崎君と付き合ってるんだ。兄ちゃんも、祝福してくれるよね？だって、モテモテだった兄ちゃんのたった一人の親友だもんね。だから兄ちゃんも、安心でしょ。神崎君ね優しいんだ私が、風邪ひいたら学校休んでまで看病してくれるし、私のこと大切に思ってくれてる

だから、もう寂しくないよ。兄ちゃんが死んで寂しかったけど、今は寂しくない。だから、兄ちゃんは
、最高の兄ちゃんは天国でゆっくりしていて」

了ちゃんは、泣きながら号泣しながら言った

「ゴメン、神崎君。泣きたくないのに、涙が出てくるよ」

「泣いてもいいんだよ、了ちゃん」

「うん・・・」

「哲平、俺は、お前の妹に手だして悪いと思ってる。お前が命賭けて守った妹に手を出して悪い思ってる

でもさ、これからは俺が、了ちゃんを守るから、大切にすることからどうか、笑顔で祝福してくれよ

俺口下手だからさつまい事言えないけど、お前が命賭けて守った了ちゃん、今度は、俺が命賭けて、
幸せに、するからさ、守るからさ、安心してくれ。お前と、俺から、命賭けて守られる了ちゃんは、幸せ者だよな。なあ哲平？俺は、兄弟とかいないから、あんまりわからないけど、お前は、了ちゃんにとって最高の兄貴だよ。俺にとっては、最高の親友だよ。これからもずっと」

僕も、涙が出てきた

「哲平、お前の前で泣くの恥ずかしいよ」

「兄ちゃん、ありがとう。私を守ってくれて。私に、生きるって幸せをくれて、私を、神崎君に出会わせてくれて、本当にありがとう」

「じゃあな、哲平これ、置いてくよ、お前が好きだった饅頭」

「行こうか、」

「うん・・・・・・・・・・」

僕と、了ちゃんの涙が止まらない

お互いにとって、そこまで哲平は大切な存在だった

了ちゃんにとっては、最高の兄貴

僕にとっては、最高の親友

哲平に、とって僕は何だったんだろう？
親友？友達？

そんなことは、考えても仕方ない

今は、叫ぼう。哲平に聞こえるように大声で

「哲平――――！！！！ありがとう――！！！！！！！！」

涙が止まった。

哲平が、もう泣くなと言ってるのだろうか

そうかもしれない、僕は、頬を流れてる涙をぬぐって

歩き出した

「あつ待つてよー」

「了ちゃん。」

「何？」

「俺達、哲平の分まで幸せになろうね」

「うん・・・そだね 私の代わりに死んでくれた兄ちゃんのために
も私が、幸せにならなくっちゃ」

「了ちゃん、好きだよ」

「私も、好き」

僕達は、キスをした

ほんのり、しょっぱい、涙の味のキス

「ありがとう、哲平」

最終話 涙（後書き）

最後の最後まで読んで下さってありがとうございます

いかがでしたでしょうか？

感想、お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6166k/>

初恋は、失恋のはずが・・・・・・・・

2010年10月8日23時10分発行